【241】

氏　名（本籍）	大内晶子（茨城県）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博甲第 5055 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**幼児の非社会的遊びと社会的不適応の関連**

主　査	筑波大学教授	教育学博士	櫻井茂男
副　査	筑波大学教授	教育学博士	服部　環
副　査	筑波大学准教授	博士（心理学）	佐藤有耕
副　査	法政大学教授	博士（心理学）	濱口佳和

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は，非社会的遊びの観点を用いて，幼児期，集団場面にいながら 1 人で遊んでいる子どもの社会的不適応を明らかにすることを目的とした。

非社会的遊び（nonsocial play）は「周囲に遊び可能な相手がいる状況において，社会的相互作用が見られない遊び（Coplan, 2000）」と定義され，沈黙行動，ひとり静的行動，ひとり動的行動という 3 つの形態に分類される。

本論文では，(1) 非社会的遊びを見せる子どもに対する保育者の捉え方と，観察された非社会的遊びの実態，(2) 非社会的遊びと社会的適応の関連についての時期と性別による違い，(3) 非社会的遊びによるその後の社会的適応の予測，という大きく 3 つの点に注目して研究が行われた。

（対象と方法）

本論文では，主に 2 年保育の公立幼稚園に通う幼児を対象に，年少児の春，年少児の秋，年少児の冬，年長児の夏，年長児の冬の 5 つの時期に調査を行った。非社会的遊びの観察は，遊び観察尺度（POS; Rubin, 1989）を日本語に翻訳したものを用いて行った。子どもの気質的特徴については保護者に，子どもの社会的特徴については担任保育者に，それぞれ質問紙を用いて評定を求めた。また，保育者に対しては，非社会的遊びに関する認知についても面接調査を行った。

（結果と考察）

(1) 日本における非社会的遊びの実態を明らかにした。保育者にとって，非社会的遊びの 3 つの行動形態は，いずれも，子どもが「満足して」「没頭して」，その行動をしているように見えた場合に，気にならない行動になりうることが示された。また，観察の結果，沈黙行動については，入園当初は，ほとんどの子どもに多少なりとも見られる行動であるが，徐々に見られなくなっていくこと，ひとり静的行動とひとり動的行動については，いずれの時期においても必ずしもすべての子どもに見られる行動ではなく，高い頻度でその行動をする子どもでも，1 年の間には見られなくなっていくことが明らかになった。また，遊び観察尺度の信頼性と妥当性も確認された。

(2) 非社会的遊びの気質的特徴および社会的特徴を検討した。その結果，沈黙行動は，自分から積極的に仲間に入っていけない子どもに，ひとり静的行動は，仲間と協調して遊ぶ能力の低い子どもに，ひとり動的行動は，感情や行動の統制が困難な子どもに，それぞれ多く見られる行動であることがわかった。ただし，これらの関連は，時期や性別によって若干の違いが見られた。

(3) 年少児において見られた非社会的遊びが，約半年後および卒園直前の社会的不適応をどの程度予測できるかについて検討した。その結果，行動が見られた年少児の時点で社会的不適応が見られなくても，その後，卒園期において，主張スキルの低さや外在化した問題行動の多さが目立つようになる場合のあることが示された。また，実際に，非社会的遊びが多く見られた男児を半年間観察し，その子どもの変容について，社会的適応の観点から検討を行った。その結果，年少児の時点でひとり静的行動や沈黙行動の多く見られた男児は，仲間から拒否されやすい外在化した問題行動が見られないことから，次第に仲間から受け入れられ，非社会的遊びが減少し，集団遊びが多く見られるようになった。しかし，主張スキルは十分に獲得されなかったことから，保育者は，子どもの主張スキルを伸ばすような積極的な働きかけや指導を行うことが必要であると考えられた。

（全体的考察）

3つの非社会的遊びの気質的・社会的特徴は，先行研究と概ね一致するものであった。しかし，時期や性別によって違いのあることも明らかにされた。幼稚園という集団生活の中で見られる非社会的遊びは，その集団や個々の子どもの成熟に伴い，より多様な社会的不適応と関連するようになっていくことが分かつた。また，仲間関係の形成と維持には，男児は主張スキルが，女児はそれに加えて協調スキルが，重要な役割を果たすことも明らかにされた。本論文で明らかにされた知見は，社会的不適応の可能性のある子どもを早期に抽出できるという点で，特に意義があるといえよう。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，これまで日本においてあまり研究されてこなかった幼児の非社会的遊びについて，観察法を用いて，その実態と社会的不適応との関連を明らかにしている。サンプリングの問題により，幼児一般に本論文の知見がどの程度当てはまるのかという点で，若干疑問を残すところはあるが，このような観察法を用いて縦断的に行われた心理学的研究は稀有であり，貴重なデータを提供しているものといえる。特に，保育者において肯定的に認知されやすい非社会的遊びの形態が，その後の社会的スキルの獲得の難しさを明らかにした点は，臨床的・教育的に重要な示唆を与えるものと考えられる。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。